研究エッセイ

中国のレンズを通した日本
――民国期のベストセラー小説『留東外史』

中村みどり（非文字資料研究センター研究員）

19世紀末に至り、清朝末期の中国ではヨーロッパ列強による領土分割が進み、一方で明治維新後の日本が国力を増すと、日露戦争後には1万人以上の中国人留学生が日本に滞在するなど、中国の日本に対する関心は高まってゆく。全面戦争を挟んだこの100年の間、日中両国は互いに眺め合ってきたが、しかし、中国が日本へ投げかける視線はより複雑な層を成していたと思われる。本稿では、20世紀初頭の中華民国初期に人気を博した通俗小説『留東外史』について紹介し、中国ではいかに日本を眺め、語り、そして想像してきたか、その一端をのぞいてみたい[1]。

1.『留東外史』とその作者

『留東外史』は、正集の第1集から第5集および続集の第6集から第10集、計160章から成る長編小説である。第1集は民国5年、1916年に上海の民権出版社より刊行され、以後、第5集まで書き継がれ、1922年には続集が刊行された。同年、続編にあたる「留東外史補」の連載が上海の週刊誌『星期』でスタートし、またその単行本『留東外史補』2冊（全13章、大東書局）が1926年に上梓される以前に、さらに別の続編『留東新史』(全36章、世界書局)の単行本3冊が出版されていたことが確認できる。1930年の時点で正集は10版、続集は5版を重ねており、この長編小説が当時の中国人読者の心を掴んでいたことを語っている[2]。では、作者はいかなる人物であり、作品の内容はどのようなものであったのだろうか。

図1　『留東外史』初集 表紙

作者である不肖生（向愷然、1890-1957）は、湖南省湘潭の人である。清朝末期の1907年に私費で日本へ留学し、当時中国人日本留学生の受け皿であった東京の宏文学院に学び、その間、少年期に身につけた武術の技と研究を極めた。帰国後は長沙で拳術研究所の設立に関わり、民国2年、1913年に再び日本へ渡る[3]。木山英雄氏の丹念な論考によれば、向愷然は孫文支持派らしき経歴を有し、2度目の来日は、反袁世凱の第二次革命に敗れた亡命者の身分であったという[4]。その日本滞在の日々に筆を執った作品が『留東外史』であった。なお、不肖生はのちに本名向愷然を用いて武侠小説を書き始め、今日中国の文学史ではむしろ民国期の武侠小説の祖として知られている。

さて、『留東外史』は、1912年から1916年まで、すなわち民国初年から袁世凱が死去する年までを時代背景とし、日本に暮らす亡命者も含めた中国人留学生たちの人間模様を風刺的に描いた作品である。伝統的な章回小説の形式を取り、多数の日中両国の男女が登場するが、そのなかでも「悪徳党」と紹介される湖南出身の留学生周撰と湖北出身の留学生黄文漢の2人が中心人物となっている。主に東京に集った中国人留学生の「飲食・賭博・女色」に溺れ、堕落した生活に焦点が当てられ、彼らが巻き起こすドタバタ劇が軽妙な筆致で語られてゆく。作品には、幾つかの物語のパターンが見られ、その一つは、留学生が軍人や警官など居丈高な日本人男性と対決し、やり込める話である。そしてもっとも多く繰り返し語られるのは、留学生と売春婦、あるいは女子学生や下宿先の下女など身近な日本人女性との色恋沙汰である。

2.『留東外史』における恋愛ゴシップ

『留東外史』の語りの特色として、日本を「淫売国」と呼び、女性化して眺めていることが挙げられる。多数の日本人女性が留学生の相手として登場するが、実際に留学生専門の売春婦などがいたことを考慮しても、すでに指摘されている通り[5]、この物語の底には、一国のナショナリズムが対象国の女性を時には過度に軽んじ、時には過度に理想化し、征服あるいは親和のシンボルに仕立てようとする欲望が潜んでいることは否定できないだろう。ただし、ここでは、『留東外史』に登場する日本人女性の姿には、作者の目を通したそ

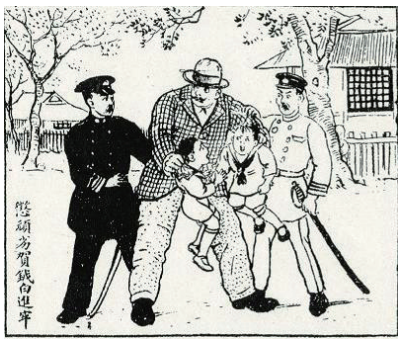
図2　『留東外史補』巻頭の漫画

の時代のリアリティもまた映し出されていることについて言及しておきたい。

『留東外史』が書き始められた1914年、大正3年前後は、日本では女子学生の大衆化が進み、いわゆる「新しい女」を取り上げた小説が増えてゆく時期であった。私小説を軸とした自然主義派の作家である田山花袋が「蒲団」(1907)、森田草平が「煤煙」(1909)を発表し、妻子持ちの男性の女子学生への恋慕、あるいは女子学生との心中未遂を赤裸々に描いたこれらの小説は、身持ちを崩す「不良」女子学生のイメージを流布させ、世間をにぎわせることになる。『留東外史』正集第2章では、中心人物の一人、留学生の周撰は通俗小説『コブシ』を手にし、社会的地位の高い博士や華族の夫人が男子学生に心惹かれ、誘惑するというストーリーを強調し、日本人女性が色好みであることを喜ぶ。『コブシ』は、当時の流行作家である小杉天外が1906年から「讀賣新聞」に連載した小説であり、侯爵夫人多賀子が美貌の男子学生と恋愛関係に陥る作品であった。また正集第23章に登場する女子学生の東條文子は、元台湾総督府高官の令嬢であり、女子家政学校に通っているという設定である。彼女は留学生張全が持っていた小説『魔風恋風』を手に取り、男女のキスシーンの挿絵のページを開き、彼を誘う。この『魔風恋風』も1903年に「讀賣新聞」に連載された、小杉天外作の長編小説である。ヒロインの才色兼備の女子学生萩野初野が友人の婚約者と自由恋愛の果て、傷心のなか病死する同小説は、当時一世を風靡し、女子学生ブームの嚆矢となったという[6]。このように『留東外史』に描かれた日本人女性の姿の一部は、大正期の日本の新聞の連載小説やゴシップを下敷きとし、その時代の女性像を取り入れていたことが指摘できる[7]。

3.『留東外史』の位置づけ

作者の経歴を踏まえれば、『留東外史』は、亡命先の日本で半ば手すさびに書いた小説であり、また近代文学の精神性を主張する純文学の文壇からは、低俗な作品として否定的に捉えられてきた。しかし、中華民国初期の軍閥政権の専制のもと、日本で暮らす留学生たちの鬱屈した様子を描いた同作品は、誇張や戯画化が見られるものの、むしろ純文学の作品では描かれなかった、俗世間のレンズから眺めた当時の日中関係の一面を映し出しており、それゆえに中国人の興味を惹き、読者を獲得したと言えよう。また『留東外史』のなかには、同時代の東京に関する最新情報も盛り込まれている。留学生たちは日比谷公園へ散歩に行き、公園内のレストラン、松本楼で洋食を楽しむ(正集第39、51章)。また帝国劇場で観劇し(正集第39、65章)、三越呉服店で買い物をして(正集第51、続集第3章)、銀座の天賞堂で贈り物を購入する(正集第40章)。現在の三越デパートの前身である三越呉服店は、1914年に新館を洋館に建て直し、高級百貨店として再スタートし、山の手階級の家族連れに娯楽の場を提供したことで知られている[8]。街を闊歩する留学生たちは、「今日は帝劇明日は三越」と宣伝された東京の都市生活を謳歌しており、『留東外史』は日本の都市文化を紹介するガイドブックとしての役割も兼ねていた一面があると思われる。

図3 『留東新史』表紙

このように長編小説『留東外史』は、革命派の裏話や都市の最新情報も取り入れた多彩な話題を読者に提供し、作者の通俗小説の書き手としての手腕が発揮されている。しかしながら、続編にあたる『留東外史補』と『留東新史』の単行本の表紙絵には、いずれも詰め襟あるいは洋服姿の留学生と着物姿の日本人女性が並んでいることに留意すべきであろう。これらのイラストは、読者の興味は、やはり何よりも留学生の相手として登場する日本人女性の姿に向けられ、それを編集者側が汲み取っていたことを示しているのではないだろうか。『留東外史』は、ヨーロッパ列強とともに中国を圧迫する日本を滑稽で扱いやすいイメージで包み、一方でその最新情報を伝えることにより、「敵国」日本に対する読者の鬱憤を晴らし、かつ「隣国」日本への好奇心を満たす娯楽小説として読まれていたと考えられるのである。

---

[1] 本稿は、拙論「放蕩留学生と日本女性――『留東外史』及び『留東外史補』『留東新史』について――」(『野草』第77号、2006年2月、18-35頁)の一部を抜粋し、加筆したものである。

[2] 刊行年については、実藤惠秀「留東外史と其の日本観」(『中国文学月報』第12号、1936年)、崔暁紅「日本の壁―『留東外史』の日常世界―」(上)(中Ⅰ)(中Ⅱ)(『饕餮』第6、7、8号、1998、1999、2000年)などを参照。

[3] 略歴については、范伯群編『中国近現代通俗作家評伝叢書(之一)国民武侠小説奠基人――平江不肖生』(南京大学出版社、1994年)、同編『中国近現代通俗文学史 上巻』(江蘇教育出版社、1999年)などを参照。

[4] 木山英雄「『留東外史』はどういう小説か」(大里浩秋・孫安石編『中国人日本留学生史研究の現段階』御茶の水書房、2002年)。

[5] 袁進『鴛鴦蝴蝶派』(上海書店、1994年)は、日本に侮辱されてきた中国の読者は、留学生が日本人女性を弄ぶ様子を目にし、鬱憤を晴らすと解説している。また李兆忠「“大中華”与“小日本”的悪性互動」(『喧闘的騾子――留学生与中国現代文化』人民文学出版社、2010年)では、「大中華」意識の危機に面して、日本を「小日本」と見下す精神勝利法が用いられていると分析する。董炳月「“留学”的風景――《留東外史》発微」(『“国民作家”的立場 中日現代文学関係研究』生活・読書・新知 三聯書店、2006年)は、『留東外史』を多角的に論じ、国家間の問題と性別の問題が重ねられていることを指摘しつつ、中国の国民性が批判的に記されている点を評価している。

[6] 本田和子『女学生の系譜 彩色される明治 増補版』(青弓社、2012年)では、『魔風恋風』と性モラルの破壊者として作られた女子学生像との関わりを詳細に論じている。

[7] 小杉天外の小説との関連性は、董炳月氏の論考でも指摘されている。

[8] 初田亨『百貨店の誕生』筑摩書房、1999年。

※図の出典
図1:1916年初版、リプリント版、発行元不明(貴重な同書は飯倉照平先生より頂戴した)
図2:1926年初版、東京都立中央図書館所蔵
図3:1925年再版、東京都立中央図書館所蔵